講　演

トインビー対談から世界へ向けての創立者の歩み
―取材同行記者からの視点―

松岡　資

アーノルド・J・トインビー博士（1889－1975）は、「20世紀最大の歴史家」「現代の良心」と呼ばれ、その主著『歴史の研究』は、「20世紀の名著」と言われる。

1969年（昭和44年）９月、トインビー博士から、１通の手紙が、創価大学創立者の池田先生のもとに届いた。「前回、訪日のおり（昭和42年、手紙の２年前）、創価学会ならびにあなたのことについて、多くの人々から聞きました。以来、あなたの思想や著作に強い関心を持つようになり、英訳の著作や講演集を拝見しました。これは提案ですが、私個人としてあなたをロンドンに御招待し、我々二人で現在、人類の直面する基本的な諸問題について、対談をしたいと希望します。時期的にはいつでも結構ですが、あえて選ばれるとするならば、５月の花が美しい季節がもっとも良いと思います」（９月23日）。

1972年５月、池田先生は、ロンドンの博士の自宅を訪問された。博士との対談は、翌1973年５月にも行われ、２年越し40時間に及んだ。

私は、聖教新聞の特派員記者として、この２年目の対談を取材した。初日、対談開始の１時間前に、カメラマンと一緒に、ロンドン・オークウッドコートにある博士の自宅の玄関前で待機していた。１年ぶりの再会がどのように行われるか、その瞬間を確かめたかったからだ。

三千種類の樹木が生い茂り、小鳥がさえずるホーランド・パーク。この緑の公園に面した７階建ての赤レンガのフラット（マンション）の５階に博士は住んでおられた。会見の時間が近づくと、知的な風貌、白髪長身、典型的な英国紳士の博士は、自宅の玄関から何回も出てきて、待ち遠しくて仕方がないといった風に、廊下を行ったり来たりされていた。小柄なベロニカ夫人と一緒にエレベーターの前で、本当に嬉しそうに待っておられた。古風なエレベーターが上がってきて、じゃばらの扉が開き、池田先生が両手を広げて出てこられた。博士は、歓待、喜びの声を発し、顔をほころばせ、手を握りしめ、ほおずりをしながら、先生を応接間に案内されていった。前年（1972年）、何日も


松岡資氏

会談をして、先生の人格、識見に魅せられ、いかにこの日を楽しみにされていたかが、よく分かった。

歴史的なトインビー博士との対談は、1972年５月、次のような二人のやりとりで始まった。この時、博士は84歳、先生は45歳。

池田先生は、語り始めた。「私はこの度、トインビー博士と対話できますことを仏法の探求者として、はたまた、未来に生きる青年の一代表として、心から幸せに存じております。今世紀、ますます動乱の世界にあって、人類が思索し、疑問とし、あるいは解決しなければならないと苦慮していることについて、私はこの際ぜひとも博士にお伺いしたいとかねてより思っていました。もしこの対話が、21世紀に生きる多くの未来の人々にとって、問題解決の何らかの緒になるならば、私にとって、また、人類にとって、望外の喜びとして考える次第です」。

これに対して、トインビー博士は、次のように応えた。「ミスター・池田、私も長い間この機会を待っておりました。私もまた、来るべき次の世紀というものに照準をあてて、物事を考えています。私には二人のひ孫がおりますが、この子たちは、次の世紀で人生のかなりの期間を生き抜くことになるでしょう。ですから、未来において、私は勿論のこと、あなたさえももはやこの世にいなくなる。それから更に長い時を経たといった時代に、世の中は一体どうなっているのだろうか。このことに、私は大変大きな関心を寄せているのです」。

そして、博士は「イギリスの哲学者バートランド・ラッセル卿が、私と同年齢の84歳の時に言った言葉は、極めて重要――」と言い、「人は自分の死後、起ころうとしていることについて、大きな関心をもつことが大切だ」との言葉を引用されていた。

先生は述べる。

「この世の中で、ある分野で専門的に深い人はいるでしょう。しかし、その個々の学問・社会活動の根源となるもの、すなわち生命の尊厳とは何かとか、人間とは何かについて総体的・本質的な視点から見透かす人は少ない。私はこの根源的なものをずっと探究し続けてまいりました。博士も同様と思いますが……」。

博士は、言った。

「実は、私も、そこの点の話を誰かとしたかったのです。私は、まだ根源なるものを分かったわけではありませんが、このたびの対談でベストを尽くさせていただきます」。

池田先生が、トインビー博士に、座右の銘は何かと聞くと、博士は次のように答えた。「ラテン語で一語、Ｌａｂｏｒｅｍｕｓ、つまり、さあ、仕事を続けよう！という言葉です。私はラテン語とギリシャ語で教育を受けましたので……。西暦211年ローマ皇帝セプテミウス・セヴェルスは、北イングランドのヨークの地で死去しました。皇帝は自らの率いる軍隊に、毎日、モットーを与えるのを常としていました。そして、まさに死なんとする最後の日に、このＬａｂｏｒｅｍｕｓ、さあ、仕事を続けようという言葉を与えたのです。セヴェルス皇帝は、大変重い病にかかっていました。しかも彼は温暖な南国リビア生まれでありながら、厳寒の地・北

イングランドで遠征の途にあったのです。しかし、彼は今まさに死の病に伏しながらも最後の最後まで成すべき自分の仕事を続けようとしたのでした。セヴェルス皇帝が、人生の最後の日に与えたこのモットーを、私は自分の座右の銘にしています」。

池田先生は、「ははーん、いい言葉ですね、 本当にいい言葉ですね」と感嘆された。

１年目、２年目と対話は、深まり、弾んでいった。２年目の初日は、午前10時から午後３時まで、５時間の対談が続いた。終始、真剣ながら「オウ、オウーッ！」と喜びの声の連発。生命論や仏教哲学について「How do you think about it?」（あなたはどう思いますか）と、先生にしばしば聞いておられたのが印象深い。

博士の背広のズボンは、長身の博士にはやや短い感じがした。「今もっている服で、余生は充分間に合うと思っていますので、その点、妻から新調するように言われるたびに、いつも済まない気がしています。私としては、服は今までの古い服を着ていて、その分、本を買いたいという心境です」と笑っておられた。ベロニカ夫人も「夫は、洋服を作るなら本を買った方がよいと言いますもので……」と言う。夫人はケンブリッジ大学の女性学士第一号。チャタム・ハウス（王立国際問題研究所）での博士の仕事を手伝っておられた。

博士の日課は、毎朝６時45分に起きて、夫人とご自分の二人分の食事を作り、ベッドを整頓して、午前９時に仕事にかかる規則正しい生活。床は萌黄色のじゅうたんが敷かれ、戸棚には哲学書、歴史書がならび、白い壁にはめ込まれたマントル・ピースの前には、前年に先生が贈られた満開の桜の花の金屏風がおかれていた。夫人が「夫も日本のお茶が好物で……」と、この日のためにとっておいたという「玉露」をコーヒーカップにさして、先生にすすめていた。

初日の対談が終わった時、トインビー博士は次のように述懐された。

「あなたとお話をすると、私は、啓発され、感動する。本当の問題点を論じあえる人間とこのように率直に語れることは最高に価値あることで、学者としてこれ以上の喜びはない。あなたの話は、人間の生命に関する重大なことであり、しかも観念論ではなく、すでに現実の諸問題をいかに解決しようかと肉薄する熱い心に満たされている。私はあなたとの対談で、私の学問の整理が可能になった」。

トインビー博士が、いかに先生と語り合うことが嬉しいのか、感慨を込めて語ったこの言葉に、良く表れている。

その頃は、よほどのことではない限り、いかなる人とも会わないという84歳のトインビー博士であった。人生の限られた時間を惜しむ中で、先生との対談を、いかに待ちこがれておられたかを知ることができる。

生涯、仕事に没頭した博士の日々を、子息のローレンス・トインビーが、「父の思い出――人間トインビーを語る」（『トインビー生誕100年記念論集――人間と文明のゆくえ――』秀村欽二監修、吉澤五郎・川窪啓資編）で次のように語っている。

「父は仕事に没頭していたのである。……父は普通の家庭生活や家族の接触から除外されていた。私にとって父は、本質的に慈愛深い人であったにせよ、縁遠い人物のように思われた。それは私とは異なった面で生きていて、ほんにたまにしかそこ

から降りて来なかったからである。そこで私の父についての想い出は、父が私たちの中にほんの短い間、彼の全く自分だけの強度に知的な生活から休息するために現れて来た場面の記憶に、主としてなってしまうのである」。

『歴史の研究』の発刊で世界中の人々から好評を得たトインビー博士。しかし、その成功に対する嫉妬の故か、権威を誇る学者たちから、いわれ無き攻撃を受けることもしばしばだった。この間の事情については、子息のローレンス・トインビーが、前述の書で、次のように語っている。

「『歴史の研究』の最終の諸巻が出た時、彼に対してなされた苛烈な攻撃、特に英国歴史学会の権威体制からなされた攻撃……（略）これらすべての狂乱によく父は耐え、毅然たる態度をとっていた。しかし父は深く傷ついたと、私は思う。これは戦前の最初の諸巻が好評であったためなおさら傷ついたのである。しかし、攻撃の大部分は嫉妬のせいであったことを父は悟っていたと私は思う。アメリカにおける父の名声、そして『タイム』と『ライフ』が父を支援したために、彼を世界的な人物にしつつあったからである。父は当然のことながらそれを享受し、またそれは非難攻撃の大きなうめ合わせであることが分かった」。「その姿は、彼が全生涯を通じて如何に不屈の人であったかを示していた」。

それだけに、創価学会や池田先生に対しても、他人の評判や噂などから判断されなかった。先入観や偏見を持つこともなく、直接会い、話し合う中で、自らの眼で、真実の姿を見極めようとされていた。

「創価学会に、そしてあなた（池田先生）に多くの批判があることはよく分かっています」と笑っておられた。「しかし、私はそのような皮相な論難は、なんら本質とは関わりあいのないことを、よく存じております」ときっぱり言われていた。

トインビー博士は、大乗仏教に深い関心を寄せていた。博士が来日の折、京都大学で学者と長い時間、話し合いを持たれたことがあった。同席した深瀬基寛氏が博士の第一印象を記している。「トインビー博士が最も日本の学者から聴取したいと思っておられるのは、仏教に関することであるらしい」（社会思想社編『トインビー・人と思想』）。「日本の学者の立場でしばしば矛盾と感じられる、科学的実証精神の必要と危機の克服としての宗教的精神の必要とがいずれもトインビーによって強力に肯定されていることであった」（同上）。

ある日の対談の途中であった。席を立った博士は、隣室の書斎にこもった。しばらくして一冊の本を抱えて戻ってきた。近著『図説・歴史の研究』（トインビー博士自身による主著の縮刷版）であった。扉を開くと精緻な筆跡で献辞が書かれていた。

「私にとって極めて大切な二人の友情と、二人が人類同胞に向ける共通の関心とのささやかなしるしとして」。

博士の、その時の心情があふれ出た言葉であった。それは、池田先生に贈られてきた数々の手紙と同じく、まさに精緻な筆跡であった。厳格、公平、正確、緻密な学問探究に生涯を通して打ちこんできた博士の人格が文字に表れていた。84歳の博士は、45歳の池田先生に、人類の未来を託す思いで、献辞を認められたのであろう。

博士は、午前中の対談が終わったあと、池田先生をバッキンガム宮殿の近くにあるアセニアム・クラブに昼食を招待するために案内された。ロンドンの知的階層が出入りする伝統あるクラブで、会員になる資格は極めて難しいということだった。そこに向かう時、ロンドン市内を博士は池田先生と手を取り合いながら、談論風発の模様で歩かれた。

「私は、ますますフレッシュ（新鮮）な気分で、元気爽快そのものです」と語り、池田先生に「ロンドンの滞在の気分はいかがですか」と問いかける。先生は「ロンドンの空気はきれい」と感想。博士は「1916年などは、暗い霧に被われ、歩こうにも先は何も見えなかった」。博士は、三代続いたロンドン子、先生は江戸っ子であった。

この時の姿を、著名な写真家の斉藤康一さんが撮影していた。この写真が、後年、「グラフＳＧＩ」（ＳＧＩの月刊写真誌）の表紙を飾ったことがある。このグラフを掲げながら、池田先生は、学生たちに語りかけられた。その模様を、随筆で、トインビー博士との語らい――21世紀へ開いた「対話の大道」、として書いて下さっている。

「まことに懐かしい、一枚の写真がある。私が、イギリスの歴史家のアーノルド・トインビー博士の手を取って、活気あるロンドン市街をあるいている場面である。……今春（2002年）の創価大学の卒業式の席上、私は、この写真を高くかざした。創立者として、いかに世界へ『対話の大道』を開いてきたか、その歴史を、後継の卒業生たちに示しておきたかったからである」。

40時間を超える対話と心と心の交流を通じて、トインビー博士の池田先生に対する信頼は揺るぎないものとなった。対談が終わったとき、池田先生は言われた。「私個人に、池田大作個人に何か忠告があったら、言ってください。大切にいたします」。

それに対して、トインビー博士は次のように答えた。「私が池田さんに個人的なアドバイスをするというのは、ちょっと差し出がましいことと思います。というのは、私は学問の世界の人間であり、池田さんは行動の人であり、極めて重要な組織の責任ある指導者だからです。したがって、私に言えることは、ただ池田さんと私とは、人類が今後どう生きていくべきかについて、見解が一致した。池田さんご自身が主張された中道こそ、今後歩むべき道ということです。

私は、創価学会が遙かなる未来を展望していることを確認いたしました。これは我々全てが取らねばならない態度です。

このような対談は、世界の諸民族の融和、諸宗教の融合に極めて重要な役割を果たすものと思います。私たちは今、日本人とイギリス人の対話をしてきたわけですが、今後、日本人とロシア人、ロシア人とアメリカ人の対話、なかんずく中国人とロシア人の対話がなされて欲しいと願っています。こうした対話が実現できれば、我々人類が融和一致にするのに大いに役立つことでしょう。多分、創価学会は、こうした対話の幾つかの突破口となれるでしょう」。

いつも、にこにこと笑顔で話しておられたトインビー博士が、この時ばかりは、

厳しいというか、真剣というか、それまでの表情とは変わっていた。未来を、先生に託したい！というトインビー博士の願いがひしひしと窺えた。

池田先生は、トインビー博士が対談の中でしばしば口にされたイエス！イエス！との言葉を、この時は、先生の方からイエス！イエス！と連発されていた。そして、「非常に広範囲な対談でございました。博士のご努力に対して感謝いたします。大変にありがとうございました」と謝意を述べられた。トインビー博士も「84歳の生涯で、これほどの対談をしたことはない」と心から喜んでおられた。

一切の対談が終わり、博士と夫人は、５階の自宅から、路上まで降りてこられ、別れを告げる先生の車を見送られていた。しばらくして、通訳をされていた医学博士の山崎鋭一さんが、遅れて池田先生の宿舎に戻ってきた。トインビー博士から、一枚のメモを預かったという。次のような伝言が添えられていた。「自分との対談は、これで一切終わりました。21世紀に向かって、このようなあらゆる対談をして、渦を巻いていっていただきたい」。

「池田さんはお忙しいとは思いますが、これは私の友人です。もし事情が許せば、お会い下さってお話をしてくださっても、決して時間の無駄にはならないと思いますが……」。そこには、親しくされている識者の名前が書かれてあった。池田先生は、そのメモを見られながら言われた。「さすが一流の人は、ここまで気を使われるのだね。直接に名前を紹介すると、会わなくてはいけないと相手が負担に感じるといけないと心配されたのだ」。

トインビー博士の厚情に応えるべく、池田先生は、ローマクラブの創設者ペッチェイ博士や世界的な科学者であるルネ・デュボス博士らと相次いで会談された。その後、世界の指導者や識者と1600回に及ぶ対話を重ねる中で、60冊以上もの対談集を発刊されてきた。その大きな源流となったトインビー博士との対談集『21世紀への対話』（1975年、日本語版発刊）は、世界28言語に翻訳され、発刊され、大きな反響を呼び起こしている。

トインビー博士は、対談集の「序文」で、意見の一致をみた点を４つ挙げている。

① 人類史の次の段階では、東アジアが主導権を握ること。
② 宗教こそが「人間生活の源泉」となるべきものであること。
③ 人間にとっての永遠の課題は「自己中心性」を克服すること。
④ 人間性の向上こそが社会を向上させる唯一の方法であること。

21世紀の人類の進むべき道を指し示したトインビー対談は、チリのエイルウィン元大統領をはじめ、インドネシアのワヒド元大統領や国連のガリ元事務総長など、世界の多くのリーダーの座右の書となってきた。

インドのネルー大学の副総長時代（1979年２月）から、池田先生と交流を深めてきたナラヤナン元大統領は、こんな言葉を寄せている。「私は、池田先生の著作を読んで、自分のスピーチなどのアイデアを引き出してきました。トインビー博士との対談集も精読してきました。読むたびに深い啓発を受けます」。

中国を代表する歴史学者で史学大師と仰がれる章開沅教授も述べている。「対談

集では、人類が直面するさまざまな重大な問題が、非常に深く論じられていました。対談集を読んだ時から、池田先生にお会いしたいと願ってきたのです」。

今や、トインビー対談は、「人類の教科書」との称賛の声が寄せられるなど、多くの人々に読み継がれる中で、希望のメッセージを世界に広げゆくかけがえのない存在となっている。

池田先生は、世界の識者、指導者と対話を続けていった。中国の周恩来総理、ソ連のコスイギン首相、アメリカのキッシンジャー国務長官、イギリスのサッチャー首相、統一ドイツのヴァイツゼッカー初代大統領、ゴルバチョフ・ソ連大統領とも話し合った。トインビー博士は、世界に対話の渦を、と池田先生に託したが、中でも中国とロシアの対話がなされることを願った。冷戦のなかでも、社会主義陣営の中ソが一触即発の危機にもあったことを心配もされたのであろう。

池田先生は、1972年、1973年のトインビー博士との対談を終えるや、翌年1974年５月には中国を訪問、９月にはソ連を訪問しコスイギン首相と会見し、12月には再び中国を訪問し周恩来総理と会見、翌年の1975年１月にはアメリカを訪問し、キッシンジャー国務長官と会見。冷戦、中ソ対立の真っ直中、およそ半年ぐらいの間に、米中ソの３大国を連続して訪問された。

中国と言えば、歴史的な先生の日中国交正常化提言（1968年９月８日）がある。「日中国交の正常化は、単に日本のためのみならず、世界の客観情勢が要請する日本の使命である、と私はいいたい」と呼びかけられた。

1974年12月５日、周恩来総理と池田先生の会見が行われた。その時の模様を回想した特集番組「周恩来～日本を最も愛した中国人～」が、かつてＢＳジャパンでテレビ放映された。

以下、その内容を、ナレーションの言葉を交えつつ、概略紹介したい。

――「中国のため、身を削って働いてきた周恩来。だが1974年６月ついに倒れ、入院を余儀なくされた。膀胱癌、すでに末期だった。入院してから半年、闘病中にもかかわらず、周恩来が病を押してまで会った日本人がいる。当時、創価学会の会長で、早くから日中国交正常化を訴えていた池田大作だ。当初、５分程度と見られていた会談は、30分にも及んだ」。

その時、周恩来の通訳をされ、中国でも要職につかれ活躍された林麗韞さんは、テレビで、次のように証言している。「お医者さんがメモを私の手に渡して、総理、会見の時間が長すぎます。お休みください、というメモでした。それをこうお読みになっても、サイドテーブルにメモを残して、また、ずっと話しておられた」。

そして、「周恩来が伝えたかった事とは？」の問いに、林さんは答える。「日中両国人民の世々代々の友好、末長い友好を続けなくてはならない。これを続けなければいけない。これを池田先生にも頑張って頂きたい、という期待、気持ちが、周総理におありにあったと私は思うのです」。

会見の席上、二人は日中友好、アジア、世界の平和について率直に語り合った。いつしか総理が日本に留学していた頃の桜の話題になった。「50数年前に桜の咲く

頃に日本を発ちました」と総理。「総理、桜の咲くころに、ぜひ、もう一度、日本に来て下さい」と、先生。「願望はありますが、実現は無理でしょう」と総理。翌75年、東京の創価大学で、池田名誉会長は、日本の学生と中国の留学生による桜の植樹を提案。その桜を周桜と命名した。そして、中国の留学生に語った。「これを友好の第一歩として、世々代々に続く友情を生涯かけて育んでいこう」。以上が、番組で紹介された二人の会見の模様である。

その創大への第１期中国留学生と池田先生との約束は、育まれていった。ある時、聖教新聞本社におられる池田先生のもとに中国の要人が訪れた。中国の外務大臣、外交担当の副総理（国務委員）を歴任された唐家璇中日友好協会会長であった。唐氏は、池田先生が第一次訪中の際、李先念副総理と会見したとき、青年として通訳をされた人物で、先生とは旧知の間柄であった。「池田先生、ご壮健、何よりです」「閣下も、ご壮健、嬉しいです」。挨拶が終わると、唐氏は後にいる人物を呼び寄せ、「新しく着任された大使、程永華大使です」と紹介。先生と程大使は懐かしそうに握手。周桜を植樹した中国からの第１期国費留学生６人の中の一人が程永華大使であった。

程永華大使は、2012年４月、創価大学で講演をした。「ちょうど37年前のこの季節に、私たちは創価大学に入りました。池田先生が滝山寮の入寮式に出席されました。日本の桜文化について語り、特に周恩来総理との会見の中でも、桜について語り合われたことを振り返ると共に、キャンパスに周桜を植えることを提案されました。創価大学と中国との交流がスタートしたのは、この時からでした。現在、創価大学は中国の20あまりの大学と友好交流関係を結んで、国の重要な任務を担う人材を次々と養成しております。既に両国の多くの創大卒業生が、中国と日本の各分野で活躍し、両国の協力と交流のために務めております。ここで中国大使館を代表し、謹んで深い敬意と心からの感謝を申しあげます」。

池田先生は10回、中国を訪問されたが、第５次、第６次の訪中に同行取材させていただいたことがある。1980年（昭和55年）４月、先生は、第５次訪中をされた。

北京の中南海に住む周恩来総理の夫人・鄧穎超さんから招待を受けられ、和やかな会談が始まった。鄧穎超さんは語った。「この応接室は、恩来同志が人民大会堂の完成まで、いつもここで外国のお客さまと会った所です。私も、今年になって初めて、この応接室で外国のお客さまとお会いします」。

花々が咲く中庭を案内されながら「外国の友人で、この庭を散策したのは今日で３人目です。ぜひ池田先生にご覧いただきたいと思っていました」。

歓迎の挨拶では「池田先生がなされる仕事のこと、すなわち、創価学会や創価大学のことをいつも思い浮かべています」と言われていた。

それから４年経った1984年（昭和59年）６月、先生は第６次訪中をされた。人民大会堂で、胡耀邦国家主席と会談。１時間半に及んだ会見の模様は、夜７時の中央テレビのニュースで２分間にわたって、中国全土に放映された。

訪中初日には、人民大会堂で、政治協商会議主席を務めておられた鄧穎超さんが、池田先生を待っておられた。席上、中日友好協会の王震名誉会長から、古代の

「妙法蓮華経」が先生に贈呈された。王震さんは、中国人民解放軍の参謀総長、元帥、国家副主席を務められた要人だが、鄧穎超さんが「王震、王震……」と呼ばれると、声をかけられる事が嬉しいといった表情でニコニコと対応されていた。鄧穎超さんがどれだけ信頼を受けておられたかが垣間見られた。

中国仏教協会の趙撲初会長から、「この経文は古代の梵語、すなわちサンスクリット語で書かれた妙法蓮華経です」と説明された。

先生は「貴国は仏教伝来の恩人の国です」「このご恩は忘れません」と心から感謝された。

またソ連についても、池田先生は、1974年９月に初訪問された。当時、日本ではソ連への恐怖や不信感が根強く、非難の嵐の中での訪問であった。ソ連側も警戒感を解いておらず、対日政策を一手に担っていたコワレンコ氏（当時、ソ連共産党国際部副部長）も例外ではなかった。

先生は動じなかった。訪ソの目的を「ともかく人間に合うこと」と決めていたからだ。「ソ連が恐ろしいのではない。知らないことが恐ろしいのだ」と。

その思いを、先生は歓迎宴で披瀝した。「シベリアの美しい冬、窓からもれる部屋の明かり、人々が心の温かさ、人間の温かさを覚えるように、私どもも社会体制は違うとはいえ、人々の心の灯を大切にしてまいることを、お約束します」。

日本と中国の接近を懸念するコワレンコ氏が「なんなら、もう一度、戦争しますか」と脅しをかけても、先生は「日本と中国が条約を結んだ上で、それを上回る強力な日ソ条約を結べばいいじゃないですか」と応じる。

それでも拳で机を叩き、反論を続ける氏に、池田先生は「もっとソ連は大人になるべきです。30年、50年のサイクルで見れば、今やっていることなど小さいことです。時代は変わりますよ」と粘り強く対話を続けた。こうした話の機会を何度も重ねるうちに、コワレンコ氏は池田先生の信念を真っ正面から受け止めるようになり、日本とソ連の民間交流の推進を力強く後押しするようになった。

ソ連崩壊から５年後、コワレンコ氏は、共産党時代の回想録を出版。その中で、池田先生について、次のような言葉を記している。「（池田氏との）会見や会談は、私に真の喜びを与えてくれ、私はいつも精神的に豊かになり、日本および日ソ関係の諸問題についての認識を新たにできた」。

冷戦時代、日本の政財界関係者から「闇の司祭」と恐れられた人物のこの発言に、日本語版の監修者も驚き、解説文に、こう綴らざるを得なかった。

「創価学会員ならいざしらず、大方の日本人は、こうした〝池田観〟に異論を唱えるに違いない。私も、彼一流の逆説的な物言いなのかと訝った。ところが、コワレンコ氏は大真面目なのである」。

その後、歳月が経ち、表舞台を退いたコワレンコ氏に対し、政財界の関係者との交流も途切れがちになった。しかし、先生は、氏を大切にし続け、ある時、夫妻を日本に招待。長年苦労をかけてきた妻が、嬉しそうに日本の浴衣を着て、心身ともに寛いでいる姿を見た氏は、胸が熱くなったという。

池田先生が初訪ソの際に会見したコスイギン首相も自宅に帰ると「今日は不思議な日本人と会った」と喜び、コワレンコ氏に対し、池田先生との出会いに深く満足し、これからの交流を大切に深めていくように指示したという話も伝えられている。

戦後日本の名物記者24人を紹介した河合史夫氏の『記者風伝』の中に、興味深い逸話が紹介されている。毎日新聞の故・吉野正弘記者のことである。「日本新聞協会賞」「菊池寛賞」「日本記者クラブ賞」の三冠王に輝き、当代きっての名文家と言われた記者である。その吉野氏が中心となり、1975年９月から1976年12月まで、毎日新聞で長期連載された特集が「宗教を現代に問う」であった。

池田先生が、初訪中に続いて初訪ソを果たし、アメリカの政府首脳とも会談を重ねた直後の時期である。この連載で「菊池寛賞」の授賞が決まった翌日、吉野氏は記事の中で、アメリカを訪問した政治記者たちが口にした逸話を紹介した。記者たちがアメリカの国防総省幹部からしつこく質問されたのは、左翼でも自衛隊でもなく、ある宗教団体のことであった、と。

「大量消費社会のようにモノの需要供給で動く世界ばかりでなく、ココロの需要供給で動く世界が存在していることに、もっと目を開くべきだ」。

「政治という表の顔を専ら追って、民衆宗教の世界を含む裏の顔を報道以前のものとして射程外に置いてきた私たちの態度は、ひどくリアリティーを欠いていたのではないか」。

だからこそ、この連載を通し、「日本社会を構造的に捉え直す作業の一環として、宗教の問題に正面から取り組んでみることにした」と、取材に臨んできた思いを綴っている。

この吉野氏が驚きを持って紹介した米政府の創価学会への高い関心。それはトインビー博士が「創価学会の興隆は、単に日本だけの関心事ではない。創価学会は既に世界的出来事である」と述べていた通りの姿だったのである。



講演会風景